二次元ぷち文庫

2D PETIT POCKET NOVELS

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『聖天使ユミエル外伝 フォールンプリンセス』
に基づいて作成しております。

※本作は二次元ドリームノベルズ『新装版 聖天使ユミエル シャドークルセイド』『新装版 聖天使ユミエルⅡ ダスクリベレーション』『聖天使ユミエルⅢ～Ⅳ』（キルタイムコミュニケーション・刊）とともにお読みいただきますと、よりお楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

黒井弘騎
表紙イラスト／本町圭祐

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

オメガエクリプス

すべてのエクリプスの頂点に立つ、影魔の王。

メシアエクリプス

影魔王の座を狙う上級エクリプスで、自らを「影の救世主」と僭称するナルシスト。

時は、僅かに遡る。

かつてある街で、一つの戦いがあった。今や平穏を取り戻した世界、人々の記憶からは永久に忘れられた戦い。それは世界の命運を別つ、黙示録の最終戦争だった。

この世界の未来を賭け争うのは、二人の少女――全てを弄び全てを滅ぼさんとする終末の悪魔と、人々の幸福を守る希望の天使だった。

「オメガエクリプス……あなただけは許さない！」

一人の少女が、凛たる声で宣戦を布告する。華奢な肢体に神聖麗美な衣を纏い、十二枚の翼を大きく広げた金髪の美少女。優しげな童顔は、今は健気な覚悟に凛々しく引き締められていた。

彼女の名は羽連悠美――またの名を煌翼天使ユミエル。小さな身体と無垢な心の全てを賭け、欲望の影エクリプスと戦い続ける正義の変身ヒロインだ。

壮絶な陵辱に屈し一度は堕ちたユミエルだったが、純真な想いはその程度では折れなかった。人々の幸せを守るため、悠美は自らの闇を認め再び立ち上がった。真なる天使へと姿を変え、今また恐るべき悪魔に挑む聖少女。澄んだ瞳は、何より気高い決意に輝いていた。

「は、ははは っ……いいよぉお姉ちゃん！　その目、その正義、その希望……んふふ、すごぉい！」

対する悪魔は、傲慢な哄笑を上げ悦に入っていた。

漆黒のゴシックドレスを纏った、[redacted]い美少女。人間ならば十代前半か、小柄な身体も無垢な顔立ちもあどけなく可愛らしい。黒衣に包まれた肉体は未発達で、くびれた柔腰やドレスから覗く四肢など折れそうなほどにか細かった。儚げな幼姿に、蝋のような肌の白さがいっそうか弱い印象を強めている。スレンダーなボディラインは、フランス人形を思わせる繊細さだった。

体つき同様、少女の顔つきもあどけない造りだった。汚れを知らぬ天使のような、無垢で愛くるしい童顔。好奇心に煌めく大きな瞳は、小動物のような可愛らしさを感じさせる。すっきりと纏められたボブカットが、幼げな顔立ちによく似合っていた。

だが、少女の魅力はその可憐さだけではない。無邪気さの中にも、深い知性と気品を感じさせるその美貌。ルビー色に輝く双眸には、[redacted]とは思えない意志力が宿っている。全格調高いゴシックドレスを優雅に着こなす麗姿は、浮世離れした高貴さを漂わせている。他者を見下す超越者の威風と、それが許されてしまう真正のカリスマ——可憐な少女は、ごく自然にそれを纏っていた。まるで、生まれながらに富貴な王侯貴族さながらだ。

そして、その印象は決して間違っていない。確かに、彼女は他者の上に立つべきプリンセス——ただし、人々に愛され希望を与える姫君などでは決してない。

黒衣の少女は、弱者を踏み躙り弄び、築き上げた数多の亡骸の上に君臨する暗黒世界の暴君なのだ。

少女の名はオメガエクリプス。すべての影魔の頂点に立つ究極のエクリプス、影魔王たる存在だ。

愛くるしい外見も高貴な美点も、その本質を隠すことなどできはしない。全身から滲み出す邪悪な魔性――無邪気な笑みには自分以外の他者全てを見下す傲慢さが滲み、血の色に濡れた赤眼には残虐の炎が揺れている。禍々しい悪魔の形を取った少女の影からは、馬鹿馬鹿しいほどに強大な魔力が噴き上がっていた。

「最高……最高最高最高よお姉ちゃん、最高じゃない！　あぁっ、たまらないわぁ……アハハハ！」

欲情した吐息を吐き出し、細腰を躍らせるオメガエクリプス。フリルスカートが揺れ、生白い太ももが覗く。くるくると身体を回転させ、見事な舞を見せつける。魔姫のダンスは洗練された美しさと同時、どこか狂気の影を感じさせた。

エクリプスは欲望の塊だ。その究極であるオメガエクリプスを突き動かすのは、どこまでも純粋で単純な渇望のみ。即ち――

「もっと、もっとよ。わたしを楽しませてお姉ちゃん。あはははは、あ～っはははははァ！」

もっと気持ちよくなりたい。もっと楽しみたい。自分が楽しければそれでいい。だからもっと、もっともっともっともっとモット――無邪気で純粋で、だがそれゆえに恐ろしい無限大の邪欲。一時の享楽のために街を滅ぼし人々を虐殺し、気まぐれに破壊と破滅をばら撒く。

そこに良心の呵責など僅かにも存在しない。そして、影魔王たる彼女に逆らえるものなど誰もいなかった。ゴシックドレスの美少女は、神のごとき力を悪魔の心で振るう最強最悪の魔王なのだ。

そんな怪物にとって、一度堕としたはずのユミエルの復活は望むべくもない感興だった。絶対的な力を持つ自分に対し、ほんの僅かとはいえ抵抗を示してくれた。それは、生まれて初めての体験だった。なんと面白い、なんと楽しませてくれる玩具なのだろう。初めて出会った、自分の意のままにならないオモチャ――次は一体何をしてくれるのだろう？復活の聖天使は、彼女にとって最高の遊び相手に写っていた。

全てを賭けて戦いを挑む聖天使に、オメガエクリプスもまた全力をもって遊興に臨もうとしていた。

「遊ぼうよ……ねぇねぇ、遊んでよお姉ちゃん！」

ぶわっ！　悪魔の影から、絶大な暗黒魔力が吹き上がる。フリルスカートが翼のように巻き上がり、黒髪を飾る蝶リボンが揺らめいた。生まれもって最強を約束されたエクリプスの力が、その全てを聖天使破壊のために収束させていく。

闇が沸き立ち、巨大な処刑鎌を形作る。己の身長の何倍もの大きさの凶器を手に取ると、オメガエクリプスは猛然たる勢いで天使に襲いかかった。

「いくよぉ……デッドエンド・オーヴァーロード！」

ブゥンッ！　振るわれた巨鎌の軌跡が、空間を根こそぎ引き裂いた。大気が悲鳴をあげ、地面がベキベキと音を立てて崩壊していく。形あるものすべてを破壊する純然たる闇――すべてを滅ぼす終末の一撃だ。

「んふふふ！　終わりだよお姉ちゃん……楽しませてくれてありがとぉ。でもね、わたしには勝てないんだからァ！」

どんな存在も、影魔王である自分に敵うはずがない。名残惜しいが、この楽しい時間もすぐに終わってしまうだろう――神の勝利という、当然の帰結を持って。

オメガエクリプスはそう考えていた。

だが――今回だけは違っていた。

「負けない。わたしは……絶対に！」

人の想い――何よりも強いその力は、悪魔の定めた運命さえ覆す。復活の聖天使は、影魔の神さえ乗り越える強さを身につけていたのだ。

「うなれっ！　セイクリッド・ディザスタ――ッ！」

コォォォオォッ！　十二枚の翼が輝き、聖女の剣撃が闇を裂く。それは、運命さえ超克する一撃。

魔王の闇と天使の光が、真正面から激突する！

「あはははは、あはははははっ！　やるじゃないお姉ちゃん……ンフフフフ、楽しいィッ！」

「っ……負けない。わたしは……絶対にッ！」
ぶつかりあう邪気と神気、狂気と覚悟、悪意と決意。
二人の力は完全な互角に見えた――だが。
「あはは！　面白いよぉぉ、あーッははは……ぁ⁉」
哄笑が止まる。同時に、何かが折れる音がした。影でできた巨大な鎌が、べきべきと崩壊を始めている。
「え？　え？　なにこれ……まさかわたしが押されてるの？　ちょっと、それ面白すぎ……あぁあァッ⁉」
崩れ始めた均衡は一瞬で広がり――刹那。
奇跡の煌めきが、終末の闇を凌駕する！
「幸せを飲みつくす終末なんて、絶対に来ない。みんなの幸せは、わたしが守ってみせるんだから‼」
「あ、あはははは⁉　こんなことがあるなんて……まさかこのわたしが……ッアアァアァァァァ――！」
まさかの敗北――唯我独尊のプリンセスにとって、それは初めて舐めさせられた苦渋だった。驚愕、屈辱、憤怒。今まで知らなかった無数の感情が去来する。
そして生まれる、もう一つの感情――。

（あれ？　これ、これって……んふ、ふふふ！）

光に飲まれ消え逝く刹那。敗残の魔王は、壮絶な笑みを満面に浮かべていた――。

※

「ク、ク……ク。ク、ククククク……！」

光一つない闇の中、一つの哄笑が響いている。綺麗に透き通った、げな少女の笑声だ。鈴を転がすような美声は、それ以上に禍々しい狂気に彩られていた。

魔性の笑声は、その空間に酷く似つかわしいものだった。広大な空間は完全なる暗黒に包まれ、天も地もあまねく流動する肉塊で覆われている。空気は淀み、邪悪な瘴気が周囲を満たしていた。吐き気を催すほどの血臭と、それ以上に濃密な性臭が鼻を突く。

床には夥しい血の海が広がり、数えきれない人間の死骸が積み重ねられていた。そのどれもが、見るに耐えない惨態を晒している。女はありとあらゆる穴を穿ち抜かれ、男は四肢を引きちぎられ内臓を掻き出されていた。

常人ならばいるだけで正気を蝕まれるだろう、悪夢じみた光景。ここは、決して人間には踏み込めない隔絶された領域。エクリプスが作り出した影の世界だ。

獲物を定め、自分だけの狩猟場へ引きずり込み思うままに嬲り犯す。それがエクリプスの基本的な行動パターンだ。だが、この夥しいまでの犠牲者の数、そしてあまりにも狂気じみた世界の有り様。この世界の主の欲望と魔性は、並大抵のものではなかった。

舌なめずりしながら、何本もの触手を蠢かすメシアエクリプス、ミミズの群れがヌルヌルと身体を伸ばし、亀頭じみた頭部を影魔の君主に近づけていく。ナメクジの丸口からは、白濁した唾液が零れていた。

「その可憐な肉体、小生意気な心、それに王の威光。すべて辱め尽くしてあげますよ！」

「っはぁ⁉　身の程知らずが、わたしを犯そうっていうの？　アハハハ、笑わせるんじゃないわよ！」

おぞましい怪物に包囲されても、オメガエクリプスはあくまで気丈だった。王のプライドと、子供じみた負けん気の強さか、弱みを見せることを許さない。赤い瞳は、強気に吊り上って相手を威嚇していた。

「フフ、強がる姿も魅力的ですが……わたしが見たいのは、そんなあなたが快楽に悶え狂う姿なのですよ。エクリプスなら当然ですがね、ククククク！」

「は、はははっ！　お前ごとき雑魚がわたしを？　できるものならやってみなさ……うあぁっ⁉」

ぶびゃっ、ぶぢゃあああ！　唐突に吐きかけられる、大量の粘濁唾液。どこまでも小生意気な高飛車姫に、ナメクジどもが直接的な汚辱で返答したのだ。お菊口を開いた軟蟲どもが、まるで射精を思わせる勢いで大量の粘液を放射した。白濁した濃汁が四方八方からぶっかけられ、漆黒のドレスが汚し尽くされる。

えっちシーン試し読み
ミカン

「や、ちょ……こ、この、あぶっ！」

べちゃ、べちゃべちゃっ！　またも生意気な口を利こうとした瞬間、真正面に移動したナメクジから汚辱の洗礼。至近距離の顔射に、口荒い魔姫も堪らず言葉をとぎらせた。粘っこい唾液で、プリンセスの尊顔はドロドロに汚されてしまう。黒髪にもヘッドドレスにも容赦なくぶっかけられ、頭の天辺から細顎までもを白濁で化粧された。ねっとりと濃厚な粘汁は、顔面中を汚しながら糸を引いて滴っていく。

「うぇえっ、っぺ、っぺ！　ちょっと！　いきなり何するのよ、汚らしいわね！　殺すわよ‼」

唇にまでぶっかけられ、生臭い味と匂いに苛まれる。高貴な身体を下賤な怪物に汚され、憤怒の声をあげる影魔姫。粘濁にまみれ汚されながら、その気丈さは見るものを竦ませるほどだ。だが強気な表情の裏側、少女は内心嫌悪を禁じえなかった。

（うぇっ……ネトネトして気持ち悪っ！　それになんて濃いの……匂うしべとつくし、最悪じゃないっ！）

ペニスじみた肉蟲の発射液は、まさに搾りたての精子そのものだった。ドレスの生地越しでさえ粘つきが感じられ、立ち上る性臭はどこまでも濃厚。直接ぶっかけられた顔面など、まるでスライムに犯されているようだった。

常に責める立場だった魔少女は、逆にその身を陵辱されることに耐え難い汚辱を感じて

いた。

「いい格好になりましたね、それでは……ククク！」

ホワイトソースを塗りつけた極上料理を、陵辱者はいよいよ本格的に味わい始める。白いミミズの群れが蠢き、亀頭じみた先端を少女に至近させていく。

白濁に濡らされた黒衣は肌に密着し、■げなボディラインをくっきりと浮き立たせていた。折れそうなほど華奢な細腰に触手が巻きつき、丸い頭部でドレス越しにお臍のあたりをクリクリと愛撫する。同時、僅かに膨らんだ胸の頂きを狙い、左右一匹ずつの線蟲が粘りついた。針金のような身体をドレスに食い込ませ、あるかなしかの膨らみを無理矢理にくびり出す。黒衣に浮いた可憐な幼乳に、極細蟲がしゅるしゅると巻きついて締め上げた。

「んっ、く！　こ、殺すって言ってるでしょ、こんな汚らしいものでわたしに触れるんじゃないわよ！」

あくまで強気なまま、拒絶の言葉を吐く影魔姫。だがその声音には、僅かに汚辱の震えが混じっていた。

無理もない。ドレス越しでもはっきりとわかる、あまりにおぞましい触手どもの触感。ミミズの身体は腐肉のように柔らかく、くねくねとお臍を擽られるとたまらない不快感に襲われる。対し、胸に巻きついた鉄線は針金のように硬質だ。可愛らしい幼乳を、硬い細紐が容赦なく虐めてくる。白濁まみれのドレスが軋み、可愛らしいおっぱいがぎゅううっ

と引き絞られた。

「っく、か……痛ぅっ！」

これまで陵辱の限りを続けてきた無敵の女帝は、当然、一度たりとてその肉体を弄ばれたことなどない初めて味わう苦痛に、美貌を歪ませるオメガエクリプス。

発展途上の青い果実は。まるで性感を発達させていない。無理矢理くびりだされた幼乳を絞り上げられても、感じられるのは苦痛と嫌悪感のみだった。

だが、そんなことは陵辱者にとって問題ではない。相手が感じていようが感じていまいが、欲望の影にとっては関係ないのだ。それどころか、小生意気な少女が苦痛に喘ぐ姿が悪魔の嗜虐心を高ぶらせる。欲望の赴くまま、メシアエクリプスは無数の触手で少女を嬲り続けた。

両手に巻きついているミミズが、ぬぢゃぬぢゃと音を立てながら蠕動する。先ほどぶちまけられた唾液がたっぷりと美肌にすり込まれ、ヌルヌルとした粘着感が嫌悪感をそそり立てる。おぞましさに四肢を揺らす少女だったが、手足を完全に開ききられた空中磔の姿勢ではろくな抵抗もできない。細い指は何かを掴むこともできず、つま先で踏ん張って力を込めることも許されないのだ。ただ力なく虚空で揺れる細足を、ミミズ触手が偏執的なしつこさで扱き続ける。

「は……っく！　気持ち悪いのよ、やめなさ……っぃ！」

変わらず悪態をつくオメガエクリプスだったが、ゾクゾクと染みてくる悪寒は堪えようがなかった。

それでも決して弱みを見せず、唇を引き締め勝気な表情を取り繕う。敵意を剥き出しにした眼光は、飢えた獣を思わせる凶暴さだった。

「おお、怖い怖い。ですが、その強がりもいつまで持ちますかねぇ？」

「……っふん！」

そんな抵抗は、下卑た欲望を悦ばせるだけ――少女自身、そんなことはわかりきっていた。それでも、魔姫はあくまで気丈な態度を崩さない。影魔王としてのプライドが、弱みを見せることを許さないのだ。

だが誇り高き強者は、それゆえ責めには弱いもの。自尊心が仇となり、羞恥や屈辱にいっそう苛まされてしまうものだ。小生意気な少女の鼻っ柱を叩き折るべく、触手たちが凄まじい力でおっぱいを締め上げる。

「く、ふぅう……っあ、ぎ！　くぁ、きつ……ッ！」

めりっ、みちみちみち！　可憐な微乳が、容赦なく括り上げられる。乳芯にまで食い込まされる虐痛に、オメガエクリプスも堪らず頤を戦慄かせた。それでも悲鳴だけはあげない高潔の魔姫だが、薄手のドレスはそうはいかない。限度を越えて引き絞られた胸生地が、ビリビリと音を立てて引き裂ける。無惨な裂け目から真っ白な果実が剥き出された。

「おぉっ、眼福眼福。全エクリプスにとって憧れの影魔姫様の裸体が拝めるとは至福の極み」

仰々しい言葉と裏腹、下卑た視線が無遠慮に乳房を嘗め回す。

プリンセスの乳房は、やはり小さく未成熟なものだった。少女の掌にでも納まりきりそうな、成熟途中の小さな甘峰。ひと口サイズのプリンみたいに可愛らしい乳房の頂点に、さくらんぼのように色づいた乳首がちょこんと乗っている。未熟ながら小生意気にも稜線を描く造形が、おませな感じで微笑ましい。気品溢れるゴシックファッションと未成熟な裸体のギャップは、インモラルな妖しい魅力を醸し出していた。

「いや実に麗しい……ククッ、しかし見れば見るほどお子様っぽい身体ですなぁ？　少々物足りませんよ」

「くぅ、う……っ。だ、だったらジロジロ見るんじゃないわよこのスケベっ！」

嘲るような口調と、それとは正反対の熱烈な視姦。成長途中の幼乳を嘗め回すように見つめられ、不名誉な寸評で罵られる。屈辱と羞恥に、気高い心が戦慄いた。憎まれ口を叩きながらも、悪魔の美貌は恥ずかしげに紅潮してしまっている。

「はは、申し訳ない。外見だけで判断しては失礼でした。ではさっそく、味見もさせて頂きますよ」

傲岸不遜の魔姫が見せた意外な一面は、下衆の欲望をいたくそそり立たせた。もっと可

愛らしい反応を引き出そうと、無数の触手が責めを激しくする。根元に食い込んだままの針金蟲が、きつく乳峰を絞り上げた。

「ふっ……あ！　く、痛ぅうっ！」

硬紐を直接乳肌に食い込まされ、苛烈な痛みが迸る。麓を締め上げられ、小ぶりな胸肉が無理矢理むにゅっと括り出された。食べやすいように搾り出された乳肉めがけ、ナメクジ触手がヌルヌルと這い上っていく。

（く……来る。おっぱい、犯される……っ！）

淫辱の予感に、一筋の汗が滴る。汚らしい怪物どもは、ドレス越しでも吐き気がするほどおぞましい触感なのだ。直接肌に触れられるなど、絶対に嫌だった。しかも、乳房を犯されるなんて――。

「ゆ、許さないわよお前たち！　それ以上近づいてみなさい、そうしたら絶対……あ、ふぁああっ！」

威勢だけの命令になど、何の力もありはない。虚しく響く強がりをまったく無視し、ナメクジたちは軟質ボディを乳房に押しつけてきた。

「あ、く、ううっ！　ふ、くぅう……！」

瞬間、両乳に走るおぞましくも甘い快悦。軟体触手の表面はヌルヌルと常に蠕動し、押し当てられているだけでもいやらしく肌を刺激される。大の字に開かれている四肢が、ピ

クンと切なげに痙攣した。
両乳に隙間なく密着したナメクジは、そのままずるずると上下に身体を動かし、青い果実を揉み潰すように可愛がってきた。ヌルついた腐肉が力強く律動し、未熟なおっぱいをこねくり回し揉み解す。
「くふ、あ……っぁ！　こ、この……ふぁぅっ！」
唇を噛み締めることさえできない。針金で締め上げられる痛みとは、まるで真逆の感覚。ぬるぬるにちゃにちゃと粘っこい愛撫は、未成熟な性感さえ蕩かせる心地よさだった。
軟体質な柔肉がねちっこく粘りつき、乳肌がにちゅっと引っ張られる。激しく蠢くナメクジは円を描くような動きも織り交ぜ、ぎゅう、ぎゅうと媚乳を揉むように虐めてきた。ダラダラと吹き零れる粘液が、拙い性感を強制的に高めていく。ヌルついた乳悦に、さしもの魔姫も艶かしい悶声を抑えきれなかった。
「おやおや？　可愛らしい声ですね影魔姫様。まさか、下賤な触手の愛撫に感じておられるのですか？」
「はぁ、っは……ふ、ふん！　そんなわけないでしょ、こ、こんなの気持ち悪いだけよ！」
リボンを小刻みに揺らしながら、気丈に吼えるオメガエクリプス。恥辱に赤らみながらも勝気な表情が、なんとも嗜虐心をそそり立たせる。
「はは、酷い言い草ですね。せっかく優しくしているのに、あんまりな罵声ではありませ

んか」

「はッ！　大きなお世話よ……く、うううっ！」

ぬる、にちゅにちゅにちゅ！　機嫌を損ねた触手たちは、乱暴に蠢いて少女を嬲り犯す。四肢拘束のミミズがとぐろを巻いて蠕動し、雪の美肌を汚辱する。さらには新たな細紐が無数に伸び、ふわりと開いた裾口から服の中に進入する。細腕を這い上がった触手たちは、鋭敏な腋窩へとその先端を押し当ててきた。細い先端部が、うねうねと蠢いて敏感な部分を刺激する。

「はっ……そ、そんなとこなんて……ひゃあぅン！」

腋下を擽られた瞬間、背筋がビクンと仰け反った。未発達な肢体は、擽られる刺激に酷く弱いのだ。脇の下から感じられるむず痒さに、さしものオメガエクリプスも可愛らしい反応を抑えきれなかった。

腋責め蟲の動きは、酷くねちっこくそしていやらしかった。尖った先端で腋窩の窪みを一つ一つ穿り返し、もどかしい甘痒を休む間もなく蓄積させる。痛みを覚える寸前、快楽だけを得られるような絶妙の力加減が性感を蕩かせた。ヌルヌルと塗りたくられる体液がローションの役目を果たし、フェティッシュな快悦をいっそう加速させる。

「はうぅン……は、ひっ。ふぁ、あ！　あっあっ！」

もどかしい、とらえどころがない、擽ったい。やめて欲しいのに物足りない。未成熟な

身体だからこその弱点を責められ、オメガエクリプスは黒髪を揺らし身悶えた。脇を締めてガードしようにも、左右に開かれた腕ではせいぜいフリルを揺らす程度の抵抗しかできなかった。無防備に晒された急所をねちっこく可愛がられ、幼い肢体が切なげに痙攣する。身悶えるたび、精液まみれのゴシックドレスがふるふると揺れた。

（くうぅっ……く、悔しいっ。この無敵のオメガエクリプス様が……こ、こんな雑魚なんかにッ！）

高貴なドレスをドロドロに汚され、おぞましい蟲どもに嬲られる。本来なら一瞬で消し飛ばせるような雑魚相手に、いいように弄ばれている。悔しくて悔しくて、憎悪で身も心も焼けつきそうなのに、口から漏れるのはよがり混じりの惨めな嬌声だ。

「ふあう……う、うぅっ！　くふぅ……うぅ～っ！」

ぬるっ、くちゅ、くちゅ。執拗で粘着質な触手愛撫に、少女は今まで意識したこともない媚声をあげてしまっていた。

「ふあぁぁ……そ、そこ……はぁうっ！　ふひぃい、あぁ、い、い……ィッ！」

ぬるんっ！　新たに伸びたミミズが脇腹に接触し、細蟲の先端がお臍を擽った。ドレス越しにフェティッシュな部分を責められ、堪らず身悶える影魔姫。子供っぽい身体は、哀しいほどに擽り責めに弱かった。

「ふあ、あ、あぅっ！　や……くふぅ、ふ……！」

声が抑えられない。何かに怯え、同時に媚びる惨めな声が。今まで何度も聞いた――いや、オモチャどもから搾り取ってきたのと同じ嬌声が。

（ううっ。わ、わたしが……こんな……！）

魔王のプライドが、惨めな敗北感に打ちひしがれる。否定しようもない――それは被虐の性感に翻弄される、敗北の泣声だった。

少女の肢体は、抵抗の意思を裏切り淫らな反応を示し出していた。白濁まみれの肌は艶かしく紅潮し、大きく開かれた四肢は切なげに痙攣を繰り返す。細紐に太ももを撫でられるたび、地面に投げ出されたパンプスのつま先が辛そうに宙を跳ねた。ドレス越しに愛撫される脇腹とお臍は淫らに熱を持ち始め、直接粘液を塗られている腋窩は燃えそうに疼きを増している。ナメクジに責められているおっぱいなど、もう蕩け落ちそうなぐらい――無垢な幼肢は、いまや明らかな発情状態にあった。

「はぁ……はぁ……はぁ。ふ、く、う……～ッ！」

ふるふるとリボンを揺すり、身体を駆け巡る淫悦を否定しようとするオメガエクリプス。だが漏れ出る声は惨めなほどに濡れ、赤い瞳は潤みはじめている。白濁で汚しぬかれた美貌は、悩ましく艶を増していた。

「ククク、影魔王とは言えやはり女。身体は正直なようですな。どうです、わたしのエクリプスとしての能力も捨てたものではないでしょう？」

その様子に、メシアエクリプスは満足げに語る。
影魔の肉体は、己の欲望を成し遂げるために特殊な変化を遂げる。女を犯し、弄び、屈服させ支配するための淫らな異能――ナメクジどもからぶちまけられた唾液には、強力な媚薬作用が含まれていたのだ。
「っは……は、は！　おめでたいヤツねメシアエクリプス。この程度の魔力でわたしを屈服させられると……ほ、本気で思ってるなん……ふぁ、ふあぁっ！」
影魔の王である少女が、その効用を知らないはずもない。だがオメガエクリプスは媚薬に犯されながらも、あくまで生意気な態度を崩さなかった。
「フフッ、流石は偉大な影魔王様、見上げた矜持です。ですが……それもいつまで持ちますかね？」
そんな気丈さが、陵辱者の征服心を煽り立てる。従順な悲鳴を搾り取るべく、触手たちがおっぱいを絞り上げ、いやらしいほど丁寧に腋窩を掃き続ける。
「あ、ふ……う、ふっ！　ふあぁ、あ、ン……！」
腋。お臍。脇腹。未成熟な性感でも感じてしまう、敏感な急所ばかりを執拗に責められた。もどかしい甘悦が、発散されることなく延々と溜め込まれる。王のプライドにかけて弱音を漏らすまいとするオメガエクリプスだが、しかし我慢すればするほど逆に快感はその甘美さを増してしまう。細い四肢は小刻みに痙攣し、吹き出す汗がゴシックドレスに染

みていった。
「ふあ……あ、あっ！　ひぅ、う、う……～っ！」
切なげに腰がくねり、フリルスカートを揺らす。噛み締められた唇からは荒い吐息が零れ、可憐な童顔は切なげに痙攣している。赤い瞳は、勝気に吊り上がりながらも被虐の艶に潤みつつあった。
「可愛い悶えっぷりですね。触手に虐められて悦ぶなど……姫様は影魔らしくサディストを気取っておられますが、本当はマゾなのではありませんか？」
「な、はっ……くふ、ふぅンッ！　違っ……貴様ぁ、どこまで馬鹿にすれば……あああひぃいンっ！」
ぬるんっ、くちゅくちゅくちゅ！　身の程知らずの言葉を吐いた瞬間、おぞましくも心地よい愛撫でお仕置きされる。粘着質な悦びに、怒声は惨めな嬌声にとって代わられてしまっていた。
「く、ふぅうっ！　こ、こんな……も、もうやめなさい……っひぃい⁉　うあ、む、胸……ぇ！」
羞恥と屈辱に、小生意気な童顔が悔しげに紅潮した。そんな可愛らしい反応をいっそう引き出そうと、ナメクジたちも乳虐を激しくする。小さなおっぱいを揉み潰すかのような勢いで、ぐちゃりぬちゃりと無理矢理にこねくり回す。無理矢理括りだされている柔峰が、

痛み混じりの虐悦にぷるぷるんっと揺れた。

子供っぽい幼乳も、執拗な陵辱によって牝の本能を暴かれつつあった。細紐に締め上げられて虐められ、いやらしい眼差しで視姦され、粘るナメクジにねちゅねちゅと可愛がられ——休みなき辱悦に興奮しきり、少女のおっぱいは一回り膨らみを増している。雪のような白肌は艶かしく紅潮し、汗と粘液に濡れて悩ましく照り輝いていた。発情乳房の頂点では、ちっちゃな乳首がおませにもコリコリに充血して勃起している。

真っ赤なさくらんぼを乗せたミルクプリンに、貪欲なナメクジたちが喰らいつく。大きく展開された丸口が、乳首ごとおっぱいをパクリと呑み込んだ。

「う、ひゃああうぅ……っ！」

両乳房を一呑みにされ、プリンセスは怯えた声をあげ身悶える。小さな乳房が、余すところなくナメクジの口腔粘膜に包囲された。ヌルヌルと脈動する肉の動きは、触れられているだけでも感じてしまうほどの気持ちよさだ。だが当然、怪物の責めはこれだけではない。貪欲な丸口が、むにむにと咀嚼するように動きはじめ——。

（あ、ああ。おっぱい、吸われる……！）

ゴクリ、と生唾を飲み込み、淫辱の予感に戦慄く少女姫。喰われる——エクリプスの責めに、容赦などと言うものはない。このまま丸口を動かされ、発情したおっぱいを容赦なく吸われしゃぶられ蕩かされる。そうなったら、そんなことになってしまったら——！

「く、や、いや……いやよ。おっぱいはダメ、こ、これ以上は絶対許さな……ッっひぃぃぃ――！」

ずちゅうう、ずちゅっずちゅっずちゅっ！　拒絶の声をまったく無視し、ナメクジたちは容赦なく発情プリンを貪り始めた。凄まじい力で肉峰が呑み込まれ、乳首ごと引き伸ばされて吸われまくる。

「ひ！　はひぃ！　いや、す、吸うの強すぎ……あうぅっ、はぁ、いひぃぃぃぃぃンッ！」

凄まじい乳悦に、さしもの魔姫も恥知らずなよがり声を抑えられない。空中磔の肢体がビクンビクンと痙攣し、細い頤が何度も何度も仰け反らされた。

吸乳責めの悦楽は、高慢な鼻っ柱を叩き折るのに十分すぎる甘美さだった。丸い口がむにむにと蠢き、発情した柔肉が際限なく吸い込まれていく。不気味な外見とは裏腹に、ナメクジの口中は地獄じみた快楽をもたらしてくれる幸福の楽園だった。口腔内はぶよぶよと柔軟で、粘ついた唾液で潤みきっている。気持ちよすぎるヌルヌルでおっぱいをぴっちりと包み込まれ、バイブレーターのような激しい脈動で可愛がられる。三百六十度全方位からの粘悦マッサージに、発情しきった牝峰が耐えられるはずもなかった。

「ひあ、あふぅう！　くあ、はぁ、はあああ～！」

被虐の性感を暴かれつつあるおっぱいが、容赦ない気持ちよさで愛撫される。さらには凄まじい吸引力でずるずると飲み込まれ、魂そのものを引っこ抜かれそうなほどの陶酔感

を覚えこまされる。たまらない乳悦に、オメガエクリプスは背中を仰け反らせよがり泣いた。ガクガクと身体が震え、ドレスのフリルが波を打つ。

「うあ、あ！　あ！　ああっ！　いやっ、お、おっぱい……いっ！　ひッ、ち、乳首もらめ……ぇ！」

ぬるぬる、くちゅくちゅ。隙間なく密着した軟肉によって、急所全てが同時に責められる。発情して熱を増した乳房は言うに及ばず、ピンと勃起してしまっている乳首も地獄じみた愛撫で可愛がられていた。蠕動し続ける口腔粘膜が乳豆と擦れあい、蕩けそうなほどの切なさが休む間もなく迸る。

「はぅっ、あう！　す、吸うなぁ……ひぁ、らめぇぇ！　も、お、おっぱい……んいいぃぃいぃっ！」

唾液ローションでヌルヌルに濡らされ高められた性感を、苛烈な吸い込みとバイブレーションで可愛がられる。軟体怪物ならではの異形の責めに、無敵の魔少女も牝の弱みを隠せなくなっていた。いくら歯茎を食いしばっても嬌声を殺せず、全身を強張らせても力が入れられない。快楽を叩き込まれるたびに体が腑抜け、乳を吸われるたびに力を奪われてしまうのだ。四肢からも力がなくなり、空中でだらんと弛緩してしまう。それどころか、魔力までもが減衰しつつあった。

「う……あ、あ？　そんな……ち、力が、抜け……」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/